

大丈夫よ！ お母さん！

vol.31

教育コーディネーター 中西美沙子



(今回のテーマ)

「時を刻む」 ということ

香りには色があると感じる季節があります。「春は名のみぞ風の寒さや」という歌がありますが、このような季節にそう感じるのはです。

自然の営みは、誰も止めることができません。でも自分が今どこに居て、どこへ行くこうとしているかを知ることができます。

「時を刻む」ことを、私たち人間はしてきました。「クロックとしての時」ではなく「五感で感じる時」を刻むと、ほんのささいな出来事であっても幸福になれる瞬間があります。

「露の臺（ふきのとう）を見つけて、思わず買ってしまっただけ、これは一体どこから食べられるのだ？」。次女からこんなメールがきました。スマホの画面に、薄緑の露の臺が、眠るように映っています。その柔らかな色から、懐かしい香りが漂ってくるようでした。

冬が終わって春めいてくると、枯れ葉の冬で小さな植物たちが目を覚まします。蓬（よもぎ）。野蒜（のびる）。露の臺。土

筆（つくし）も柔らかな土を破ってでてきます。

次女から露の臺の行方を早速知らせてきました。ネットでレシピを検索して、初めて露味噌を作ったこと。あつあつのご飯にのせて、「すごくおいしかった」こと。

亡くなった母は、山菜が好きでした。季節の移ろいを楽しむように、母はていねいに山菜料理を作りました。春先には、台所から微（かす）かに、あの鮮烈な香りが流れてきました。天ぷらにして、露味噌にしました。

家族の味とは不可思議なものです。伝えようとする思いを超えてつながって行くものがあるのです。

母の声が聞こえる。台所から料理の匂いがする。父の植木を切る音や子どもたちが家の前で遊ぶ声。それらが作る世界があつて初めて、「家族の味」が生まれると思えるのです。

次女が露味噌を作ろうと思いついたの

は、八百屋さんで露の臺を見つけたからだけでなく、かつてあつた家族の遠い記憶に無意識に触れていたからといえます。次女も結婚して、今ではたのしい四人の家族。露の臺の次女からの報告は、消えてしまつた時が新たに形を変えて根を下ろしたような、緩やかな安心感を私に与えました。

私たちは安心よりも不安なことに目が動きます。それは消費の動向とそれに比例するような過剰な情報の中で生きているからです。人はそれらに対処するだけの力をもつていません。でも直感的に「これは違う」と感じる感性はもっています。心が急ぐ時には少し立ち止まって、風の音や寛（くつろ）いでいる陽だまり、芽吹こうとしている樹々の芽などを感じることは、誰にもできます。そんな時を大切にしていけば、「これでよい」という道が見えてきます。

次女が住んでいる町には、昔風の八百屋さんがあります。ご主人が旬の野菜や果物を選び、「一番おいしいもの」をお客さんに用意してくれている姿を見ると、「食べ物の時」を体で感じているのがわかります。

土の色に味を感じ、果物の艶（つや）と色の上等な香りに手で触れ、節くれだった彼の手が握っているのは、鮮烈な季節のプレゼントなのでしょう。

次女が作った露味噌に惹かれるように、私も露の臺を手にし、刻んで味噌汁にいたしました。鮮やかな香りが、私を佇ませます。そして過ぎて行つた時が再び巡ってくるのを感じるので。露の臺から香っているものは、家族の記憶とそれを束ねていた緑という色彩であつたと。



Profile

教育コーディネーター

中西美沙子

静岡大学客員教授。文章教室「スコール」画廊「キューブブルー」などを主宰。文章教室は書き方を教えるだけではなく、生き方や考える視野を学ぶところです。

☎ tel 053-456-3770

中西美沙子

検索

ピアノシモでね

中西美沙子 著

著書の「ピアノシモでね」（東京書籍）は、中日新聞に連載された人気コラム「つかまえて！こころ」をまとめたもの。同著には、親子の問題もいろいろ描かれています。（税込1,500円）

※お求めは浜松市内の谷島屋で。

